

「新聞への意見投稿」 平成26年度掲載文の紹介

※ 東京新聞 「発言」 平成26年4月9日（水）掲載

「片側空けねばもっと安全に」 2年女子

駅などのエスカレーターには、片側を急いでいる人のために空けるという習慣があるが、改正した方がいいと思う。そもそもエスカレーターは、体が不自由な方などのためにある。片側に寄ることができない方もいるし、そういう方の横を駆け抜けるのはとても危険だ。現に駆け抜ける人とぶつかり、けがをする事故が後を絶たないそうだ。

また、通勤ラッシュ時にはホームにあるエスカレーターが渋滞する。片側を空けなければ、今よりずっと解消されるはずである。

現在、鉄道事業者はエスカレーターでは歩かないように、というキャンペーンを行っている。大賛成だ。意識を変えていくのは大変だが、お年寄りや体の不自由な方が安心して乗れるようになってほしい。

※ 毎日新聞「みんなの広場」平成26年4月18日（金）掲載

「素晴らしい最後の年にしたい」 3年女子

今年の春休みは、受験への第一歩を踏み出すために「もう3年生になるんだ」という自覚を持って過ごすことができた2週間だった。3年生になると、本当に行事などがあつという間に過ぎてしまうし、仲間と過ごす時間も1日が1分しかないくらいに速いものだと思う。だからその貴重な時間を悔いのないように過ごすために、一人一人が自分の目標をしっかり持ち、みんなで前進していける充実した学年にしたい。

そのためにも運動会や学習発表会などの中学校生活の中の少ない行事を思う存分楽しみ、そして何よりクラスや学年で団結して涙と笑顔があふれる感動的な行事にできるようお互いが助け合っていきたい。

全員が自分のゴールにしっかりとたどり着けるよう声をかけ合い、高め合って、先輩たちが築いた伝統を超えられるような素晴らしい最後の1年にしたい。

※ 毎日新聞「みんなの広場」平成26年4月20日（日）掲載

「家庭の味を大切にしたい」 3年女子

「母の味」というものがある。幼い頃、食べた料理を懐かしむ言葉だ。とても温かくて、私の好きな言葉の一つだ。このごろは、男性が料理することも多く「父の味」がある家族もあるだろう。

一方で、冷凍食品やコンビニ弁当などで済ませている家族も増えている。確かに、共働きで作る時間が少ないという家庭も多いと思う。だが、それを次の世代につなげてしまうのはどうだろうか。先日、私は学校で調理実習をやったのだが、予想以上に、皆、上手にできていた。その中には親があまり料理をしないという人もいたはずだ。では、子どものうちはできるのに、大人になると料理をしなくなるのはなぜか。それはやはり親の影響が大きいのではないかと思う。幼い頃、食べていたものに冷凍食品が多くては、料理から遠のいてしまうのは仕方がない。私たちが、それを改善していかななくてはいけない。「家庭の味」を次世代につなげていくことが大切なのだと思う。

※ 毎日新聞「みんなの広場」平成26年5月13日（火）掲載

「『忘災』にならないように」 2年女子

先日、防災宿泊訓練があった。学校に泊まり、救命救急や災害について学ぶ学習行事だ。

印象に残ったのは、日本赤十字の方による災害についての講話だ。いつか必ず災害は起こる。その時に防衛でなく減災ができるか。そのためには今、何ができるのだろうと思い、自分なりに地域の安全マップを作ったり、わが家の防災対策を強化したりしようと思った。

「一刻も早く忘れない」「いや、決して忘れてはならない」という二つの思いが複雑に交錯する自然災害。だが、どうしても向き合い、付き合わなければならないものだ。

だからこそ私たちは、月日の流れの中で「防災」が「忘災」、つまりは災害を忘れてしまうことにならぬよう最も注意しなければならない。また、今回の体験から学び、考え、しっかりつないでいくことが大切だ。

人を助けるのは人。いつか起こるであろう災害で後悔しないようこれからもしっかり考えていきたい。

※ 東京新聞 「発言」 平成26年5月14日（水）掲載

「大黒柱の父親 心から感謝を」 3年女子

この春、私の叔父が地方へ転勤した。単身赴任だ。仲が良かった叔父に簡単に会えなくなり寂しい。私のいところもある叔父の息子は今春、中学生になった。一人っ子のせいかな両親とすごく仲が良い。だが、家族を支えてきた叔父が家から離れ、母子二人で不安な生活をしなければならない。

こんなことを考えていると、つい自分の父のことも考えてしまった。もし父が家を離れなければならないことになったら、その存在を補うことはとても大変なことだと思った。

私は、一家の大黒柱である父の存在に気付かされた。ふだん、父に対して冷たい態度をとっていた自分が情けないと反省している。そして今は、父に心から感謝できる。反抗してしまった分、たくさんの親孝行をしたい。

※ 毎日新聞 「みんなの広場」 平成26年5月30日（金）掲載

「達成感を得たソーラン節」 3年女子

私の中学校には、運動会で全学年女子がソーラン節を踊るという伝統がある。私は、中学校生活最後の運動会で、実行委員を務めた。実行委員には、全体をまとめる、構成やフォーメーションを決める、下級生に一つ一つ振り付けを教えるという仕事がある。

「最高のソーラン節演技を作りあげたい」という強い気持ちを抱き、練習に取り組んだ。しかし、全体練習の度に不安になった。振りを覚えていない人。真剣に踊っていない人。そしてなにより声が出ていない人がいたからだ。私たちが注意しても本人にやる気がなければ変わらない。だから自分が率先して、もっと声を出すこと、もっと真剣に踊ることを実践した。するとみんなのやる気も上がっていった。当日、青空の下、女子全員によるソーラン節は最大限の力を出して踊り切ることができた。声も校庭に響きわたるほど、大きかった。リーダーとしての苦勞をたくさん味わったからこそ、とてつもない達成感を得ることができた。

※ 東京新聞 「発言」 平成26年6月4日（水）掲載

「踏み出したい 人助けの勇氣」 3年女子

私が自転車に乗っていた時のことだ。5分ほど前を歩いていたおばあさんが思いっきり転んでしまった。私は急なことでびっくりしてしまい、何もできなかった。そして心配だったが、その場を通り過ぎてしまった。幸い近くにいた女性が「大丈夫ですか？」と、手を差し伸べていた。

家に帰ってから、大きな罪悪感にさいなまれた。あの時なぜ声をかけられなかったのか。自分を情けなく思い、とても後悔した。

困っている人を助けることは勇氣がいる。もしかしたら相手には余計なお世話かもしれない。そう思って後ずさりしてしまうことも多々ある。でも、うれしいと感じる人の方が圧倒的に多いと思う。だから、親切心と勇氣を持って一歩踏み出したいと思う。

※ 東京新聞「発言」平成26年6月11日（水）掲載

「骨付き魚食べ 伝統食を学ぶ」 3年女子

和食がユネスコの無形文化遺産に登録された。学校給食でも煮魚や焼き魚といった日本の伝統食を食べようと、骨付き魚を普及させる動きが広がっている。

私は、うまく骨を取ることができないので焼き魚を食べるのが苦手だ。特に、小骨の多いサンマなどは諦めて骨ごと食べることもある。学校給食で骨付き魚を食べることには、食べづらくて時間がかかるという声もあるが、骨付き魚をうまく食べられるようになることにつながると思う。

学校は学びの場だ。給食で骨付き魚を食べるということは、日本の伝統食について学べるという点でとても良いことだと思う。やはり日本人として、日本の伝統食を上手に食べ、伝え広められるようにならなければいけないと思う。

※ 毎日新聞「みんなの広場」平成26年9月11日（木）掲載

「写真が伝える命の重さも」 2年女子

震災や戦争の遺体写真を世間に見せるべきか。そんな記事を見つけ、考えた。遺体写真の公開に関して、日本は特に敏感だと感じる。教育現場でも「死」について教えることは少ないようだ。さらに東日本大震災を経験し、より「死」をとりあげなくなったという。知人を亡くしたりした子供たちの心のケアを第一に考えていたからだ。私も田舎が仙台にある。当時10歳だった。子供に配慮し、接し、報道してくれた教育現場やメディアに対し心から感謝している。

子供たちの負った傷は深い。決して数年で癒えるものではない。しかし、東日本大震災は確実に風化している。震災で失った命の重さまでも風化させないためには子供たちへの配慮だけの報道ではいけないのではないかな。

誰もがいつかは直視しなければいけない現実がある。いままで通りの「死」を避けた報道だけでなく、少しずつでも命の重さにしっかりと目を向けていくことが大切だと思う。

※ 毎日新聞「みんなの広場」平成26年9月15日（月）掲載

「東京一きれいな町にしたい」 3年女子

私の暮らす文京区には「文の京クリーンウォーク」というボランティア活動がある。「文京区を東京一きれいな町にしよう」をスローガンに、区内の小中学生が町を歩きながらごみ拾いをする。このイベントは今までに10回開催されており、私は4回参加してきた。

普段通っている道でもよく見ると、たばこの吸い殻や空き缶が多く捨てられていた。また、花壇や自動販売機の下にもごみが落ちていて拾うのが大変だった。今年は170人以上の仲間と約30袋のごみを拾った。自分の町がこんなに汚かったのかとショックも受けたが、大きな達成感が得られた。町がきれいになるにつれて、自分の心の中もきれいになった。

私は文京区をもっときれいな町にするため、この活動にこれからも参加したい。だが、それ以前に道端にごみを捨てないこと、ごみは決められた場所にきちんと捨てることが大切だ。

※ 毎日新聞「みんなの広場」平成26年9月21日（日）掲載

「失いたくない二つのもの」 2年女子

最近私は、友達に「失いたくないものは何？」と聞かれました。何のことかと思いましたが、ちょっと真剣に考えてみました。

私の頭に浮かんだものは、次の二つです。

一つ目は、「人」。私を支えてくれている全ての人です。家族や友達など、誰一人として代わりになる人なんていません。みんな、私にとってかけがえのない存在です。二つ目は、「気持ち」です。感謝の気持ちや思いやりの心、優しさは、人間には必要不可欠だと考えます。何かに感動したりときめいたり、時には悔しかったり、いらついたり。こういったたくさんの感情があるから、人間が成り立っているのではと思います。今楽しいこと、いいなって思えることを、幾つになっても変わらず同じように感じられたら、ずっと楽しく過ごしていただける気がします。こういったことを、考えてみるのもいいなあと思いました。

※ 産経新聞「ひこばえ倶楽部」平成26年9月22日（月）掲載

「自然災害に対する危機感を」 2年女子

この夏、各地で大雨が続き、雨量記録を次々に更新していった。たびたび起きる大雨による被害を新聞やテレビで見聞きし、他人ごとではないと思った。

大雨は、洪水だけでなく、土砂災害ももたらす。広島市内で起きた災害は土砂で家が流され、家の中がめちゃくちゃになったりしている。これらのニュース映像や写真を見て3年半前の東日本大震災のときを思い出し、自然災害は本当にいつ起きるか分からないと、その怖さを改めて感じた。

私はこれまで自然災害によって被害を受けたことはない。しかも「危機感」というものを意識して生活しているわけでもない。

私の住む東京は、30年以内に大地震が起きる可能性が高いといわれている。不確定だが可能性のある限り、被害が少しでも少なくなるよう緊急時の準備が必要だ。避難場所を日頃から家族と話し合うなど対策をしっかりとっておきたい。

※ 毎日新聞「みんなの広場」平成26年9月24日（水）掲載

「園児たちの笑顔から学んだ」 2年女子

私は先日、職業体験を行いました。私は3日間、保育園で体験させていただきました。私にとって、この体験は、とても良いものになりました。これらの理由はたくさんあります。

まず一つ目は、目標を達成できたということです。私の目標は、「園児に3日間楽しかったと思ってもらう」ことでした。園児の笑顔がたくさん見られたので、達成できたと思います。一番感じたのは、お楽しみ会で、私たちがダンスを踊った時のことです。たくさんの園児がノリノリと一緒に踊ってくれました。「やってよかったな」と思いました。次は、新しい発見ができたということです。園児の目線になってみると、保育園の庭にも小さな虫がいっぱいいるなど、普段何気ないことに気づくことができました。この体験は、とても達成感が得られるものでした。私には8歳下の妹がいます。今回学んだことを忘れず、妹に今まで以上にやさしくしたり、家や学校生活に生かしたりしたいと思います。

※ 毎日新聞「みんなの広場」平成26年10月4日（土）掲載

「目標に向かってあきらめない」 2年女子

私の学校は、オリンピック教育推進校で、「一日校長先生」として、元体操選手の新竹優子さんの講演会が開かれた。講演会を聞いて、私は、新竹さんは、真っすぐな方だと思った。「目標を立て、それに向けて頑張る」という、新竹さんの言葉が心に残った。新竹さんが挫折しそうになった時、新竹さんのお母さんは、「あきらめちゃあかん」と言ったそうだ。すてきな言葉だと思う。私は、テニス部に所属している。あきらめそうになることもよくある。だが、本当にやめたいのかと考えると、新竹さんと同じように、ここで逃げ出したくないと、毎回思っている。だからとても共感できた。

私は、まだしっかりとした夢がない。だが、今、できることをコツコツとやっていき、小さな目標でもクリアしていけるようになりたいと、新竹さんのお話を聞いて感じた。東京オリンピックも、協力したいと思った。日本の文化を海外の人に知ってもらうため、活動ができるといいと思う。

※ 産経新聞「ひこばえ倶楽部」平成26年10月6日（月）掲載

「目の当たりにしたプロ意識」 2年女子

近くのファミリーレストランで3日間の職場体験を行った。

仕事は大変すぎて常につらいと思っていた。しかし体験させてもらったレストランでは、働いている人は集中しなければいけないときにはとても真剣な表情を見せていた。またそれ以外ときには笑顔で楽しく仕事をしていた。プロの人はメリハリをきかせながら、本気で仕事に取り組んでいると思った。

調理場や事務所では、食事で利用するだけでは分からなかった消費期限の管理などの仕事がたくさんあることを知った。ここでは衛生面に非常に気を使っていて、お客様のことを常に考えているということを実感した。

レストランフロアでの接客では、お冷やを運ぶ仕事をやらせてもらったが、緊張してぎこちなくなってしまう。店員の人たちは、笑顔とはっきりとした口調で、ここでもてきぱきと動いていた。プロ意識を目の当たりにするよい機会になった。

※ 東京新聞「発言」平成26年10月8日（水）掲載

「信号に従う姿大人が示して」 2年女子

交通信号を無視する人が増えている。最近、小学生などの子どもでも無視が目立つ。何のために信号があるのか、と思うほど無視する人が多いのだ。

例えば、私が部活帰りのこと。信号が赤に変わる瞬間に、自転車に乗った男の子が猛スピードで飛び出していく。朝の通学時には、車が一台も通らないことをいいことに、いい年をしたおじさんが信号を無視して道路を横断していた。

こんなふうに、子どもから大人までが信号無視をしている。私は子どもの信号無視は、大人がやっているからだと思う。子どもは大人のまねをして育つ。子どもにまねをされないためにも、大人はきちんと信号に従ってほしいと思う。

※ 産経新聞「ひこばえ倶楽部」平成26年10月20日（月）掲載

「職場体験で学んだ粘り強さ」 2年女子

近くの和菓子屋さんで3日間の職場体験を行った。和菓子は大好きだが、仕事は立ちっぱなしの作業でとてもつらかった。一日一日帰るたびに足がむくむように疲れがたまり、これが毎日続いたらと考えると働くことというのは、本当にきついと思った。

職場体験では、実際に和菓子作りや、店の人の話を聞くことによってさまざまなことを再発見した。和菓子は、季節や月ごとにもようや色などが工夫されていて、洋菓子にはない雰囲気やうまく表現されていることに驚いた。

今回の体験で私は「集中して丁寧にやること」を目標にして取り組んだ。その点では、できたという達成感はある。しかしその一方で商品の包装や焼印を入れる作業は、なかなかうまくできなかった。同じことを繰り返し、ようやくコツが覚えられるという。仕事には、丁寧さだけでなく、粘り強さも大切なことを実感した。

※ 毎日新聞「みんなの広場」平成26年11月3日（月）掲載

「有言実行で前進したい」 2年女子

限界を考えずにトライアスロン競技を続ける「義足の鉄人」古畑俊男さん。古畑さんは片足に義足を付けてトライアスロン競技を行っている。先日、その古畑さんから公開講座講演会でお話を伺った。

古畑さんの話を聞いて、私は、やり遂げればそのつらさ以上の達成感を得られることを学んだ。私は、今までつらいことがあればそれから逃げてきたし、何一つ精いっぱい努力したことはない。いつもバレーの大会などでは出番の直前に「頑張ります」と言うことができない。努力をしていないから、自分に自信がないのだ。だが、古畑さんは自分を奮い立たせるように、いつも自分を追い込んでいる。「限界を考えない」という古畑さんの言葉は、とても心に響いた。いつも物事をすぐに諦めてしまう私は、弱いなど感じた。これからは、自分のすべきこと、したいことをできる限り家族や友達に宣言し行動したい。そして、精いっぱいの努力をし、次のバレーの大会で満足いく結果を出したい。

※ 産経新聞「ひこばえ倶楽部」平成26年11月3日（月）掲載

「中学生生活の振り返りで考える」 2年女子

中学に入ってちょうど振り返り地点にやってきた。外見では身長も高くなったし、おしゃれにも気を使うようになり小学校を卒業した頃とは全然違う。

しかし最も変わったのは中身だ。たった1年半で目標と夢を手に入れることができた。

私は部活でテニスをやっている。最初はいっぱい泣かされ、あんなに弱かったメンタル面も強くなり、「自分に勝つ」という気持ちで取り組めるようになった。

後悔もいっぱいある。キャプテンとして初めて出場した大会で満足のできる成績が残せなかった。しかし今の後悔は、きっと自分の目標へとつながり、そしてそれは努力次第だと思う。

あと1年半の中学生生活。「ああすれば…」「こうすれば…」との後悔を、今後の1年半で「いい経験だった」と思えるようにしたい。そしてその経験を後輩にアドバイスとして伝えたい。嫌な過去も必ず未来につながると信じたい。

※ 産経新聞「ひこばえ倶楽部」平成26年12月1日（月）掲載

「アスリートの“強さ”に感激」 2年男子

2016年にリオデジャネイロで開かれるパラリンピックのトライアスロン出場を目指している古畑俊男さんの講演会が私の学校で行われた。

52歳の古畑さんは、若い頃に病気になり、足の痛みで苦しんだ。その時、あまりの痛さから右脚の膝から下の切断を自ら決めたという。その勇気に驚いた。

また片脚をなくしても、下を向かず前向きに、自分に起こっていることをしっかりと受け止めながら日々生活している姿は尊敬できると思った。

古畑さんは50歳を過ぎて、ランニングなどで筋肉を鍛え、20、30代の選手と互角に戦っており、毎日の努力が大切なことを教えてくれた。古畑さんには限界というものがないのではないかと思うほどだ。

もし古畑さんがパラリンピックに出場したら、メダルを取れるよう絶対に応援したい。目標に向かって頑張る古畑さんの話を聞き、自分も夢を見つけて頑張りたいと思った。

※ 東京新聞「発言」平成27年1月14日（水）掲載

「支えあつてのよいリーダー」 3年女子

「リーダー」は、とても大変な仕事だと思う。人をまとめる力だけでなく、客観的に物事を見る力や瞬時に的確な判断をする力などが必要とされるからだ。

私は学級委員長を務めている。一番苦労しているのは話し合いの進行だ。みんなからの意見が出てこない、私が一方的に話して終わってしまう。逆に、みんなが積極的に参加し、盛り上がったときなどは、大きな達成感が得られる。大切なのは、みんなが積極的に物事に参加することだ。

先の衆院選では投票率が最低だった。国民全員が政治に興味、関心を持たなければ良い世の中はつくれない。リーダーが場を盛り上げること、そして周りの人がリーダーを支えようとする気持ちは、何事に対しても不可欠だ。

※ 東京新聞「発言」平成27年2月25日（水）掲載

「出会いと別れ 大切にしたい」 3年女子

いよいよ卒業シーズンを迎える。卒業で思い浮かぶ言葉は「別れ」である。友人や先生…節目であるからこそ多くの別れがある。しかし、別れは自分を成長させ、新しい出会いを生み出すものだと思う。

今の中学生活がずっと続くとしたら、お互いよく知っている友人と楽しい生活を過ごせるだろう。だが、新しい出会いや成長するきっかけは少ない。新たな場所に足を踏み入れることは勇気も必要で、自分を伸ばすことができると思う。

一方、別れるときに感じるのは多くの人への感謝の気持ちだ。別れは、あらためて自分や自分を支え見守ってくれた友人や周囲の人たちとの関係を見つめ直して、成長できる機会だと思う。だから私は、別れも出会いも大切にしたい。

※ 読売新聞「気流」平成27年3月1日（日）掲載

「卒業 新たな出会い楽しみ」 3年女子

「別れ」があるから「出会い」がある。よく耳にする言葉だ。私はそれまで、別れは悲しみばかりで、新たな出会いのことなど考えてもいなかった。

2年のころ、いつも一緒にいた親友が転校した。親友がいない学校に登校するのはつらく、悲しかったが、そんな私に話しかけてくれた人がいた。それまでほとんど関わりはない人だったが、相談できるほどの仲になった。初めて、別れは悲しみばかりではないことを知った。そして別れの悲しみと、出会いの喜びは比例しているように感じた。

だから今、私は別れることは怖くない。卒業を控え、期待で胸いっぱい。もちろん大切な仲間と離れることは悲しいけれど、それをしっかりかみしめたい。卒業する仲間にも、素晴らしい出会いがありますように。

※ 読売新聞「気流」平成27年3月3日（火）掲載

「身内の癖 絆深める」 3年女子

私の癖は、寝る時に布団を顔までかぶることだ。母いわく、私と私の父に共通の癖だそう。これは、幼い頃からの見よう見まねで、身についたのかもしれない。

だが、親や兄弟と共に共通した癖を見つけると、身内の「印」のような気がして誇らしく感じる。また、よく知らない遠い親戚の人に似た癖を見つけると、急に身近に感じる。癖は親子、親戚などの関係を親密にし、絆を深めるものだと思う。だから、私は「共通点」を見つけて絆を深め、関係を大切にしたい。

※ 産経新聞「ひこばえ倶楽部」平成27年3月16日（月）掲載

「“小さな春” に人の優しさ」 2年女子

先日、通学路になっている道路で小さなタンポポのつぼみを見つけた。偶然見つけた“小さな春”に私は何だか心がうきうきして、いつ咲くのかなと楽しみになってきた。

よく見るとバイクのタイヤの跡が、そのつぼみを避けるようについている。きつとつぼみを見つけて避けて通ったのだろう。

タンポポのつぼみを見て、大切にしようと思ってくれた人がいた。そしてそのつぼみが開くのを私と同じように楽しみにしている人がいる。そんなふうと思うと自然に笑顔になった。

家に帰って、タンポポの話をもに話した。母は「そう。優しい人がいるのね」とほほえんでいた。

春の訪れは、私たちに幸せを運んでくれる。何気ない一日一日が、少しずつ春色に色づいていくような気がする。春の暖かい日は、人の心も温かくしてくれる。あのタンポポが黄色い花を咲かせるのが待ち遠しい。

※ 毎日新聞「みんなの広場」平成27年3月17日（火）掲載

「お世話になった先輩たち」 2年女子

3月になった。入学、卒業という言葉を目にする機会が増えてきた。

私が一番感慨深いのが、3年生の先輩が卒業してしまうことだ。部活動でお世話になった先輩方にそう感じる人が多い。私は、バスケットボール部に所属している。今は部長として活動しているものの、入部したての、まだ右も左もわからない私に、さまざまなことを教えてくれたのは一つ上の先輩方だった。バスケの技術面はもちろん、体育館での準備、先生方やコーチへの礼儀など、社会にでた時にも必要なことまで手取り足取り教えてくれた。廊下で会った時はいつも笑顔で声をかけてくれた。そんな先輩方がもうすぐ卒業してしまう。感謝の気持ちをしっかり伝えるために、気持ちのこもった色紙を贈ろうと思う。そして、先輩から直接教わった「礼儀」で、先輩方に感謝の意をきちんと表そうと心から思った。

※ 読売新聞「気流 [U-25]」平成26年3月18日（火）掲載

「集団行動で求められること」 2年女子

学校や社会生活の中では、グループ全体が一つの目標に向け行動する「集団行動」を求められることが多い。

私は先日、学校の校外学習で神奈川県鎌倉に行ってきた。女子3人、男子2人のグループで私はリーダーを務めた。当日は、あいにくの雨だった。しかしみんなが協力したことで、歴史ある鎌倉を満喫できた。

私たちは、事前に携帯電話の使用と買い食いの禁止をみんなで決めて行動した。みんなが約束を守り、自分勝手な行動をとらなかったのが、校外学習を楽しむことができた最大の理由だと思う。

さらに地図が苦手な私をみんなが助けてくれた。その他の部分でもみんなが協力してくれた。それによって一人では味わえない喜びを共有できたと思う。

今回の校外学習で、集団行動の良さを学ぶことができた。この貴重な体験を半年後の京都・奈良への修学旅行に生かしていきたい。